

特41

989



此は
九段
の
前編下

後編上

新説曉天星五郎前編下巻

第十一回

義心鎮石長沼實を明す
八面獸心大鳥悪を隠す

第十二回

白蓮舊縁を説く東海寺の方丈
傳助舊恩を語る岩井家の墓前

第十三回

圖を開て地理を示復讐の端緒
酒を薦て紅涙を流壯士の辭別

第十四回

舊僕郷里に還る一包の惠金
豪傑赤坂に至る一封の上書

第十五回

空余の謀計孝子死地も陥る
閨房の脱破衆敵遺書を示す

第十六回

義士命を落し壯士の輕傷負ふ
全門の孝子を救俠士番兵説く

第十七回

長沼の屋敷に山田君命を演ぶ
米澤の城中に岩井其身を寄す

第十八回

武術を誇つて和志塚敵手需む
力量を顕して星之助九平懲す

第十九回

宰相を感せしむる一首詠歌
弟子を勵ましむるの長途使節

第二十回

諸侯の仁愛妙に機會を得る
曉天の降雪急に警敵も迫る

新

説

珠

如

曉天星五郎

前編

伊東孝子

下



新説暁天星五郎前編下巻

第十一回

義心鏡石長沼實を明す
人面獸心大鳥悲を隠す

今立んとする星之助を雲時と禁むる長沼が其所へ坐らせ形を更め夜稽古あししと言ながら
深夜及んで立歸り夫のみあらす袴の裾に血汐の着し体を見れば築地に於て靈應に會しと
言るの偽りにて來る道ぞがら人をあやめ物を奪ひて賊に等き所爲あししに非るやと問れて
此方の大きに驚き心せくまゝ血汐の着しを知で歸りて見答られ疑ひ受ての今更お包も詮な
き事なりと心を決して歸る途中上杉殿の長家下にて箇様くの者に出會餘義あく四個を手
に掛さる事小嶋彌六が義心のこと白地に語りし後さてまゝ再度言るやう初よりして此事と
やし上んどの思ひしりども劍の吾儕を護る物にて人を斷可き器に非ず是を好んで斷る者の
匹夫の勇と言ふよし常々教を受まつれば餘義あき事どのやしなむら故もあらぬに四個の者
を殺したるより深くも包も一度偽りやしたる罪の赦させ給へうしと一伍一什を演たるに長
沼の聞ことくゞ或の驚き或の感じ然ること有とも知ずして賊あど爲る物あるかと言し
の吾儕が誤言なりと汝が武藝尋常ならずと嫌ての思ひわたれども斯まで成どの知ざりけり

夫に就ても頼母しき小嶋彌六といふ者なり足輕風情の輕き身をもて義心のあさく大身
にも羞ざる行ひ感服しより最奥床し武士なるのなと言つ、四邊見返りて我姪岩井星之助
近く來れと言けるは此方の不審と膝を進め彦師匠様よの吾儕を我姪ありと仰せあるの如
何も不審尤も至極今まで深く包みわて只凡庸の内弟子の如くに待遇のふりし素生を明さ
ば其方の血氣に逸りてどの様か災禍あさむ計られずと思ふて言も出さざりしが斯と知ね
ば其方の千金の身を輕々多く多勢を敵手に闘争あどあせしと聞ての包み難し今ぞ大事を明
すのへ心に秘てゐるこそ能けきるもく汝の善兵衛が一子に非ず其主ある岩井藤十郎が思
子あるまゝと其藤十郎の桐ヶ谷の八幡宮より戻り掛お花と言る女を救ひ开を妾とて其腹へ
出來し即ち其方にて藤十郎の吾儕が父一風軒の太刀筋受け我と水魚の交りわれ兄弟の
義を結びしこと其後吹上おん庭にて騎射の不覺を取しかり太田原に羞しめられ其無念やみ
難あく彼方へ切て入んとせしを如何ある故にかお花の自害その首を持ち藤十郎の彼所へ
行しが欺し討に會て敢あき最期を遂ぬ道は是れ汝が三歳のときにて其後の始末の箇様く
と家斷絶のこと用人の中根善兵衛夫婦の忠義中根の星之助が九歳のとき貧に迫りて悪心起

し紀尾井坂ふて計らざるも父一風軒に邂逅し高論を聞き身を羞て其夜切腹し果して自己翌朝其場に至り直小星之助を引取來しこと遺書のこと其外も委敷演て納む死し遺書出して見せたるうへ汝が父の我香華院天龍寺へ葬つる中根善兵衛ふり非して品川東海寺に墳墓を置く岩井藤十郎といふ者なるぞと過越方を脱示に星之助の初て知る我身の上父母の横死と善兵衛が忠死を悲みそるにも泪に暮てるさうしがやうくにして此方又向ひ一旦の義に違ひせ給ひで父が死たる其後厚恩吾情が上に及ぼし多年の間御養育下されましたる耳なら老家の奥秘とする所も傳へられさる御恩のはど死すとも忘色いひし就て父が横死のまど今日まで知でをりしゆる仇お月日を過せしが斯傳承る上うらの子として一日も猶豫し難し是より直に太田原へ斷入渠を討取てと言を長沼押止め明さバ汝の血氣の勇み逸るを以て今日まで明さうりしの技のこととも太田原の一刀流の達人なれど其方が腕前をもて討んこと最々易き敵あがら今討んとの時早のりと言の外の事ならず太田原の目今勢ひある老中田沼主殿守の親族あれば吹上の騎射首尾よくせしより主殿守の執成もて忽地に番入あし追々と昇進し高の千八百石の多さを賜り其身の土佐守と任官し勢ひ朝日の昇るが如く眷屬



内弟子多ければ汝が行バ必ずしも妨げあして本望を遂なん事いど難うり依て今二三年無念を忍び堪へをりなバ其中に時節を窺ひ吾情が引連彼方へ討入て首尾よく本望達さを可し必走逸る事あかれと細々意見しうりし星之助の敵の榮えを聞より無念いや増て遺恨の泪に暮る物か師匠の言葉理あ當りて悻らんやうも非れバ只流涕してゐたりけり長沼かさねて星之助が腰刀ある辰明丸を手に取上て紙を拵り其鯉口は封印あま是を示しく借いふやう敵を知り己を知者の百度戦ひ百度勝と言り如何俱不戴天の仇とい言へ今討んどせば災禍あらん殊に汝の父の仇を報せんと言ふ大志あれ

己身みみの千金せんぎんの至寶しほうあり故ゆゑに此後このち今宵このよの如死ごと狼籍らうじやく者ものに出會いであども只管ひたすら堪忍かんじんを旨めいとして恥はを忍しのび
 て其場そのばを脱のがれ身みを全まふまで大望たいぼうを達たつする時節ときせつを待まちに如ごとじ然しかるも今宵このよの如ごとくにして首尾しゆびよく
 敵てきを打取うちとりて其身そのみも恙つひなければ能よけき設もも敵手あいてに手者てしやあつて生命いのちを其所そこに失うしなはれ父ちちの恨うらみを誰たれ
 うの雪ゆきのんよし又夫またまで及およばすども父母ふぼの遺體ゐたいに傷きずを著つけあはば不孝ふかう此上このちうある可べうらふを故ゆゑも本
 望まつ逐とるまでい如何いかにある事ことをも堪忍かんじんして忍しのび難がたさを忍しのべといふ我教訓わがけうくんの是これある封印紙粘ふういんしちの素もと
 より柔弱ろうじやくまで断つんと思おもへば指先さしゆびにても断つんに最も安やすけれども信義しんぎを籠かごて結びたれば必かならず走は是
 を断つるとさく徐しゆくに時ときの至いたるを待まちと敵あへ諭さとせる金言きんげんの又有また難がたき義心ぎしんの程ほども星之助ほしのすけの先ま々ま
 で案あんじ給たまへるおん言葉ことばいうで違背いさいの仕つかつらん爾後このちどもに身みを慎つしみ決けつして御苦勞掛ごくろうかけませねば
 一日ひとひも早はやく太田原おくだはらを討取うちとりすやうたゞ單ひとへ願ねがはつると言いをりに短夜みじやはやく明近あけちかく寅刻うまづの太
 鼓聞こきゆるに長沼ながぬまの心附こころづき今宵このよの事ことを敵かたの方かたへ知しれあは彼方かたも用心ようじんして後々のちのさめ宜よろし
 じ努ゆめを秘ひめて漏もらす可べからず翌日あそより又弟子またでし師匠家内ししやつかないの者ものにも悟さとられまじ逸明方えいめいがたの程ほどもあ
 し退まりて寝ねよと云いけるに星之助ほしのすけも心得こころえて己おのが閨房ねやへぞ入いりたる不題大鳥彦六ふだいおほとりひこむの廻あつる星ほしの
 夜よを寐ねかね目覺めさる程ほどに圃かへ行いたく出いきば師匠ししやうの居間ゐまも中あたりて常つねに非あで語かたらふ聲こゑの聞きえり

るにぞ不審いふかしみ何事なにごとやらんと後戸あしほを隔へたて聞きともなしに打聞うちきべ思おもひ掛かけあや星之助ほしのすけの敵持身かたきまつみの一
 伍び一什立聞いっしやたききあして思おもふやや斯かる縁故えんこの有ある故ゆゑにか師匠ししやうの日頃ひごろ渠みちを最負ひるぎし人並ひとなみならず教授けうじゆせ
 し仔細しさいのやうく解わかりさう全まし弟子でしある吾儕われらに縁故えんこなければ能よも教おしね依よ依よ最負ひるぎなる師匠ししやう
 を見み做なふ星之助ほしのすけもまた用もちゐらるゝを鼻はなに掛かけつゝ日頃ひごろより自己おのれを高たかぶりゐるされば何いぞ渠みち
 にも師匠ししやうに愛目あいきを見みせて日頃ひごろの怨うらみを晴はらさんとこそ思おもひけるも幸さいわひあるうか此物語このものがたりを聞き
 たる上うへの頼母たのりしげなき師匠ししやうの許もとも居ゐらんより太田原おくだはらへ行き此旨このめいを注進ちゆしんなして用意よういを整ととのへ岩
 井い討入事うちいりごとあらば不意ふいに起おこつて弓銃砲飛道具ゆみてつぱうひ道具をもて討取うちとりせあは功拔群こうはつぐんと用もちゐらるゝ此身このみを樂らに
 送おくるのみ目下勢たうじいひや高たかき田沼たぬまの殿とのの親族しんぞくされば夫それへ便たよらば運うんに叶あひ劍道けんどうをもて御直參ごちやくさん
 お召めれん事こともあからさやの應待おうえまて海路かいじゆの日和ひわとやらん言いはるゝ茲このの事ことあるう我身わがみの上うへにの福ふく
 徳とくの三年目さんねんめありと肚はらも問とひ肚はらも答こたへる思案しあんを定め拔足ぬきあしなまて徐々そそくと己おのが閨房ねやへと歸かへりしを
 知者しや絶たてあらずりけり憎にくむ可べさうか大鳥彦六おほとりひこむ其身そのみの不精ふせいの想おもひすして師匠ししやうを恨うらみ岩井いそを妬ねた
 み恩おんを受けぬを擔かへず利慾りよくに迷まよひて由縁ゆゑんもなき仇あだに荷擔かたんし孝子かうしをして死地しちも落おして心こゝろ地
 よしと爲なす人面獸心ふんめんじゆしんある白痴しんちにこそ有ありけれ

第十二回

白蓮齋縁を説く東海寺の方丈
傳助舊恩を語る岩井家の墓前

師匠の話しに身の上を委敷知し星之助閑房へ入し亡父の無念の程を思ひやり諭も合さず
其夜を明し起出ると直ぐ暇を乞ひ品川へもき墓参りをあさんと家を立出たる斯て星之助の
品川ある東海寺に至り見れば茲の往る寛永年中台命に依り澤庵和尚開創せしる禪院ありて
背後の方の山高く前面ある方の海深く境内廣く塔中多く江府に無比の禪林にて聞しに増る
大刹ありて浸隨意の意を生じ花を求めて氷を汲み墓地を其所の尋るゝ遙の彼方に石を以
て玉垣をたると其中又石塔一基立てありて七寶の中に七曜の紋のみ僅に見えければ是を
りと近寄見るに想ふに遠くで正面又岩井家累世の墓と記し側に曉霜院及應方遊禪門明和六
年十一月十一日と記しあるの父藤十郎が法名なる可く又其傍ら少ある石塔ありて冬霜乃
禪信女と記せしるの全享年月日あるも母のお花の法名あらんと推して二箇の石塔の昔を拂
ひつ氷を手向花を捧て黙頭玄父母茲にお坐しますを以て過まゝ十八年墓参りさへ致さる
罪の許させ給へりし昨夜計す師匠より身の上のこと御無念のことさへ委敷傳承り今日取敢

ず参詣せしが遠くならずまて仇敵の太田原を討取て首級を墓前に供へまつれば登時修羅の
妄執を汚晴しあざり下さる可し披苦與樂と念じ終り立んとすれど懐舊の泪に暮て立ちぬし
が斯ての果はと泪を拂ひ戀々として墓原を出て彼方へ行んとするをり寺僕とも覺えさ者道
の傍に待てをり夫と見るより小腰を屈め和君の岩井星之助様と仰そる方に成る可し然に
て此寺なる方丈さまが御目に掛りお話しを致した事あるされば後述せし参る可きと吩
附られて先刻より吾儕の御下向を待たたりぬイザ此方へと言けるに星之助の我姓名を疾も
知れて不審あが跡に從ひ行くと墓地を巡りて奥まりたる所へ案内せしつゝも茲の即ち
方丈されば進せ給へと言捨て漢の外手の方へ行ぬ此時この住持と見え年齢六十年餘り
ある老僧一個立出て聖敷の中へ伴ひ上るに星之助の姓名を名乗て吾儕今日初て此御寺へ
参詣せしに如何なれば星之助の疾も推し給ひてしと言へ老僧うち笑て愚僧の茲の住
職ふて白蓮といふ者なるが今朝勤行に本堂へ行たる歸途寺内にて見掛し和殿の先づ年不慮
の横死を遂たりし岩井藤十郎の面影恰好毫も變らず似たる耳の羽織も岩井の定紋附き
るされば茲に至つて考ふるも彼藤十郎に一子ありて名を星之助と呼なしつ死すとき已に

三歳よりぬ然すきバ今茲の十八年その年齢も似つうのしく確に夫と思ひしかバ下男を以て案内させし岩井の家と愚僧との深き因の事と演う思へバ今日の緩々と語り給へと言つゝも手を拍鳴まで小僧を呼び茶菓の饗應懇切ある星之助の我名を知し仕細のやうく解りしが因の有るといふ事を聞き欲とぞ思ひたる白蓮累て言るやう凡る禪家の彼我とぞく茶の湯を嗜む其中にも愚僧の殊に好むといひ和殿が祖父若狭守どのも深く好ませ給ふらへ師檀の交り深きより是なる寺へ詣でらるゝ折に茶を立互に語り春は日さへも永しとせざる程にて有しが和殿の父の幼年にして父に別れ夫が茶道も知悉する用人中根善兵衛の愚僧が祖父と交りある事を知ゆへ父公を薦め愚僧が門下に入せしかバ再度故人に會心地し茶道を教へ秘訣を授けら幸傳へたりしが其人の三十年も待すに此世を去りお花どのさへ非業赤最期是また過去の因縁と断念れども断念られぬ戀嘆の俗にも全き泪なく二個が死骸を引取形の如くに埋葬せし後に岩井の断絶し和殿の用人善兵衛が携へ去しと聞しのも生死の程さへ分ら成しが朝子二代に交り深くなしる甲斐もなく其子の行衛も知ることをと朝暮遺恨に思ひるたるに離合時あり今日計を會見て古派の丈夫に成し實は喜ばざる限

りありシテ只今の何處に在や苦しうらむの打明してと眞實見ゆて言われは坐之助の恭々しく兩手を支へて住持に向ひ祖父の爲にの朋友にて父の爲にの師ありける方とも知でいひしが御言葉おてやうくと初て承知仕つりぬと答へて善兵衛夫婦がこと長沼執子が信義のと昨夜上杉の長家下にて四個の者を殺せし次第師匠が教訓其身の上を知らる事より鯉口に封印されたる事までも語りて再度言るやう實の父母の墳墓も知悉二十年足せ過したる説をせんとて参りしに疾くも老師に知れ奉り仔細のお言葉賜るの此上もなき身の幸ひ此後どもに親祖父の如くに思ふ給とれりしと言ふ白蓮



感心して親のなくとも子の育と世俗の言に違ひせして父母を一時に夫ひしが家業の忠義と伯父の義心に人並優れて成長し武藝文學進しこと未頼母しき壯士あり然ども短慮功を爲さずと言ハ伯父御の言葉に従ひ能く堪忍の二字を守りて時の至るを待ち太田原を討ち岩井の家名を再興されよと猶細々意見をなして晝近と湯濱を振舞返せしに星之助の又の日を契りて茲を立出て歸ると其まゝ長沼よ今日の始末を演たるに四郎左衛門も奇遇も感ぜ白蓮禪師が道德の高きを頼に感じける復説星之助の夫よりの後月の中よの二度三度父母の墳墓へ參詣し其度毎よの住職を訪ひけるに白蓮も死する親の藤十郎に會ふ心地すどて星之助を最淺のらを待遇て茶室よ伴ひ茶を吞せ禪機の悟道佛法の空義を語る日も多く其年もや、十月の末と成まに星之助例の如く東海寺へ到りて墳墓よ參詣せんと寺内へ這入バ頃ハ今小春の空とて麗かみて海面より來る風さへも徐々として暖のく木々の梢ハ狂花のをのしう咲しも見榮ありと葛原近く來るをり但見れハ年齢五十餘にて仲間体の一個の男我より先に參詣し墓を掃除し花を捧げ回向を爲ておたるを今岩井家の此墓へ參詣すハ我外よハ絶て有とも覺ゆるよ如何ある者か床しよと思へハ雲時イとて夫が容子を窺ふに彼

方ハ人の有とも知ず回向し果て行んとするを星之助ハ呼止め事卒爾ある様あれども家名絶たる岩井の墳墓へ參詣をす其許ハ如何ある由縁のある人ハ聞ま欲とぞ言けるに漢ハ岩井の顔つくく見やりて一人點頭ながら是に附てハ物語のいあるに立ながらお話しなさんも落附ねバ夫ある石に侈腰を掛てと砂を拂ひて腰を掛させ自己も側の株へ腰掛もと吾儕ハ丹波國笹山在小松村ハ農夫にて傳助といふ者なるガ若年のころ父母分れ身を放蕩し持崩し國にもゐられぬ所より同村にゐた朋友ガ芝西應寺門前にて八百屋をさしてゐるを便り此大江戸へ出府なし夫が世話にて古川の岩井様の御屋敷へお草履取ハ住込でハ身の非を悔て御奉公を大事お勤し甲斐あつて殿若狭守様の御意に叶ハ佐渡奉行をハ淨勤のをりよも彼所へお供やし御奉公をバ勤るうち殿ハ彼國でお隠をありしハ其白骨ハ吾儕が袋へ入て首おかけ江戸の侈屋敷まで持參して此御菩提所へ葬るまで侈世話をさしたる程されバ又藤十郎さまの淨草履取も成ておん目を給とるうち其殿様にハ不慮の御最期搦て加へて御家の斷絶御家謀衆さへ四落八散此身も侈暇の出るに泣々麻布を立退てと先其央を明し、ガ此男に依り星之助が仇敵の屋敷の容子を知る次第ハ張數限りあれバ次の回到説分可し

第十三回

繪圖を開て地理と示す復讐の端緒
酒盃を薦て紅涙を流す壯士の辞別

復讐の傳助が夫より後の赤坂の桐畑に住居し、二千五百石を頂戴す黒川佐四郎様方へ
傍草履取仕込で今日までの御奉公を勤てのれを以前の御恩を忘るゝ事の有らざるを此近
邊へ来る毎に必ず參詣致しますので今日も背後の白金まで用事が有て参りしゆる御墓の
掃除を致しましたと言を聞て星之助其舊縁と舊恩を忘るゝ心も感心おし借の汝の家
仕へし僕にて有たるか吾儕もその岩井の嫡男星之助といふ者なるとの聞て吃驚顔うち眺め
オ、夫ちら和郎若様で御坐りましたかお別れすした其時の未だお三歳で御坐つゝに何の
間ひや成人なされ然て汚顔の亡き殿様も生寫しある和郎の面影おなつうしう御坐りまし
たと言つゝ、呀と泣出すを星之助の慰めて幼稚の頃にて汝の顔の見知されとも名乗て見れば
なつゝのしさも又一入るに此所にて話もなら老幸ひ亭午にも近々れば門前へゆき諸共と晝
飯しゝめ話をせんと言つゝ、進んで墓に参り回向終りてイヤと計り先よ立にぞ傳助も涙を
拂ひ後に附き門外へ出料理屋の奥坐敷へ入り酒を飲み飯を喰ちとる間ひ善兵衛が妻の病

死中根が切腹一風軒のこと長沼が義心成長の事まで委敷話をあしたりしは傳助一々聞事毎
も且の感じ且の愁を斯る難義をささると言も元と言バ太田原然して和郎の仇討を。如何
もなさん心されど大恩の有る師匠の戒め暫く待との言をしより逸る心を押鎮め待てゐる
も敵地の容子不案内よて是非もあしと言バ傳助小膝を進め夫での仇を汚討さる汚心あを
せも太田原が邸の容子を計うね猶豫をあして御座る事の設し夫されバ僥倖かれ吾儕の國者
が彼所の屋敷に仲間を致してそれば是は便り容子を聞出し上れば一日も早く御本望を
汚還ささきて下さりませと眞實見ゆて言出す岩井のほどく感心おし下郎に似氣ささ汝
が精忠君父の仇の俱不戴天彼方の容子の解りなバ假令師匠の戒めありとも破つて踏込仇を
討んのオ、勇しき其は言葉と和郎の爲に父公の仇下郎の爲にも御主人の敵であれば如何も
して急度探つて差上すればと猶も細々密談おし兩人其所を立出て別きて家路に歸りける
斯て星之助の師匠の許へ歸ると其ま、今日計を東海寺ある墓前よ於て舊僕傳助に環會し事
を話せば長沼も其奇特ある志操を得難き者ぞと稱へける然れども此方の心の中よ思ふ由さ
へ有かれバ邸の容子を探りする事の達も言ざりけり登時長沼の此方に向ひ和郎も豫て知如

内弟子大鳥彦六の先づ頃より剣道修行の爲に諸國を巡りたしと身の暇を乞ふとも度々
 なりしが今日の是非にといふて旅促装まで盡くちし暇を乞に素より然れみ惜のらざる弟子
 にて有れば言がまよく最前暇を遣ひたり就ての今日より道場の代稽古を杉浦お委ね
 たるもへ其方も心を附て不都合あさやう萬事の指揮を頼むのしと彼大鳥の身を退し太田
 原へもき大事を漏すと知ぬ師匠に星之助畏まりぬと言承して其まゝ立し是非なけれ約し
 し言葉に違ひざる傳助の四五日過て此道場へ星之助を尋て來れば部屋へ通しマテ太田原の
 邸の容子のと筋に問は筋さ答へ東海寺前でお別れせし其明る日に國者の仲間男を呼出し夫
 とのあしは聞出せし邸の容子の此通り繪圖に認め参りしと懐中よりして取出し其所へ廣げ
 てさし示し表門より斯入は茲の玄關の長家と言葉の尾に附き星之助形を改め吃度見やり
 又裏門より忍び入は此物置を巡り出松を目當に切戸を明けイヤく夫の浮雲御座る茲に
 の深見古井戸あれは然ら道道を弓手取り屏を乗越奥庭へ進んで南の雨戸を外し道入
 し右の長廊下の左の主個が常の閨房を立切彼所を押へ前後を塞いで切入は太田原が首
 取んこと此星之助が手裏に有り此繪圖面あそ時に取て六箱三路孫吳が秘書あそ有難えと押

頂き思ひす上る大聲を音高しとて傳助の止て
 猶も膝すり首せ然して本望涉遠なざる其日の
 何と涉究めありし。然らなり來る十一月十一
 日の父と母とが十七回忌の正當されは其夜を
 待て切入んといふ我覺悟。夫で其日吾儕も
 御主人様の敵もゑ一所に涉連あされまして。
 其嘆願のさる事あから忍び入つ、討敵向ふに
 助太刀あれはとて此方に助太刀伴ひ行しと言
 る、時の首尾よくとるも末世の後まで耻辱
 されは此義の思ひ止まる可し又我とても生死
 の界もし運拙くて反討は會は汝に對面も今日
 を限りの事なれば我討れしと聞とさの亡き跡
 吊ひ頼どと勇が中にも愁を含別を告る金



鎮心に傳助強てと言のねて望みを失ひ泪に暮しがやうくにして目を押し拭ひ夫ほぞ迄に
 思し召バ侈供の思ひ止まる可ければ萬事附て御由断なく目出度本望違しあるやうと祝
 しておその歸りたる去程に星之助の繪圖手に入し上から一日も早く本望をと思へ師匠
 に明すとき止められんハ必定さればと心一つに思案して其日の来るを一日千秋待に長
 さやうされど天明三年も際なく行き十一月十日の成たるに星之助の多年の本望遂るハ明
 日に迫りたりと其日のまづ天龍寺なる善兵衛の墓へ参り復讐の由心に演べ歸ると其まハ部
 屋に入り何くれとかく仕度を整へ明れば品川東海寺に参りて父母の墳墓に向ひて回向し果
 し後白蓮禪師を訪問て餘所あがらなる暇乞ひ爲しつゝ其所を立出しが思ひ出せば今宵此父
 母の仇をバ討といふも日外上杉家の長家下より狼藉者會をとり小嶋彌六が情ああらざり
 此身の繩目の恥を蒙り生命の全ふ爲難さの今日茲に至るといふも全く彌六が賜のなり然
 るに今宵忍び入り設し討れあハ生前の對面とても叶ハ難く遺憾さハ一方あらねば是より彌
 六が許へ訪問過夜さりの禮も言ひ餘處あがらにも辭別を告ん嗚呼然なりと思ひ定め歩を
 運きて丸の中へ這入て彼所へ至り見る彌六ハ全役諸共に辻番所に座りわたるが夫と見る

より珍しと立出互に其後の無事を祝ひに星之助の種々お話しやまらざり事も御座れば其所
 までも勝ひ立て廊外へ出取料理屋の二階へ登り酒を進めて恭々しく過にし頃の禮を演べ其
 後訪問すし上んと思ふにも似せ隙なく其まハ打過ひひたる無禮ハ免させ給へかしと言を
 彌六ハ打消て首て會し和殿されども武藝勇悍比ひなきあぞ義に依り落し参らせしが殺され
 たりし者共の素より出所不定めて死人に口あき世の體へ死骸の翌日取捨られ吾儕ハたハ是
 はどある事を知悉に居しりと叱られて事濟たれば和殿の禮謝ハ過分ありと其身を卑下して
 高ぶらざる實ハ大丈夫の舉動ハ星之助のいよハ感ハ類ハ酒をハ勸るうち天晴名譽の武士
 あるら我にハ外に兄弟と言ものとても有らざれば此彌六をハ兄とし頼み終身語ハ過すあ
 らハ此上もなき僥倖あらんハ吾儕ハ今宵仇を討身首尾能く事を致せばとて法を犯せば存命
 難し又仕損をば反撃何れの道も今宵限りに迫りし身あきば是ぞ此一世の別れと成り以
 て行き世の豪傑と交りを結ぶ事ハ成らざるのと思へハ胸よせぐり來る泪を見せじと吞込
 と竟に溢れてとらハ落て碎くる元の露末の車と滑る身と覺悟をすれば壯士も保ち兼る
 涙泪膝に掛りて濡せしハ彌六の見る前面目あしと咳ハ紛せぬたりしハ必苦しく見へにけれ

第十四回

舊僕御里に還る一包の恵金
豪傑赤坂に至る一封の上書

思ひ内に在れば色外に顯るゝとや尋ね來りし星之助が酒を頼て待遇をから央に至りて自然憂ひの色の出るに這い不審と思ふうち泪をさへも翻せしむる彌六の吃度眼を定め意合バ千里も合壁意合ねバ合壁も胡越と言バ和殿と吾儕の意合し此間會し節より捨難く今日和殿の方より來り我を誘引此所で酒汲交すいかん身の知を吾儕の上あき樂みと思ひをりしに愁を含み又泪をバ翻せし如何ある仔細の有る事か包を語り給へかしと問詰るまで星之助原來泪を見られしのと悔しく思へ今更に隠しも成らねバ其身の素生父の横死の事ハ更かり用人のまど長沼がごと又傳助が事も演今宵彼方へ忍び入り仇を討んと思ふより生前一度救れたる禮謝も演て此世の別れを告んと誘ひ來りしが世に俊れざる御貴殿と交りさへも成せして此まゝ別れをすすのと思へば最恐くして豫て期しする事ながら又今更のやうに覺え不覺の泪を暮らりける無禮の許させ給へりしと一伍一什を演たるに彌六の聞て長息吐き原來和殿ハ其昔吹上御殿で騎射のをり不覺を取て太田原の邸に斷入討れらる古川岩井

の子息ありしと然る由緒ある方とも知れ今無禮の許させ給へ其無念をばさし押へ時運の來るを待といふ長沼殿の思慮も能え又其致へお伴るとも俱不戴天の仇おれバ單身にして行んといふ和殿が勇氣も眞に頼母し其上あらず吾儕お別れを惜む程まで思ふて下さる上からん是より共に彼方へ行き助太刀おして本望を達させやしたけれども我小祿とい言あから上杉家といふ主を持ち其切米を噛む以上ハ我吾儕の仇討お加勢をなして此生命を的に掛んの不忠おれバ加勢を致すも成がさしと最氣の毒氣に演けれバ星之助の莞爾と笑み義を重んずる和殿ゆゑ話をあさバ助太刀されんか然すれバ助太刀欲さ爲話せし様に探をんも口惜さゆゑ此事の口外なさじと思ひしが不覺の泪を悟られて詮方あき儘斯の次第貴殿の御加勢あき事こそ反つて吾儕が本意ありと言放ちたる大膽不敵お彌六もほどく感じ入幸先祝ひて兩個の酒盃を巡しつ心地能こそ別れけり借も星之助の家へ歸り部屋に立入言葉に背くの恐れ多けれと俱不戴天の仇あるゆゑ封印を斷り今宵單身太田原方へ忍び入り父の仇をバ報ひしひぬ多年の教育御高思の死すとも忘れぬしと師匠に宛る一通を細々と書終る頃其日も早く暮染しよ更るを待バ冬の夜の最と長さが如くに思ひれ意焦立立つ居つ爲らち

初更二更も過しぬ素破時刻こそ来りたきと奥の方をへ窺ふも師匠の風の心地すとて宵の中より臥房に入て今の眠に着たる頃と思ふの恰ど節好と身輕は促装兩刀帶柱に掛たる金引を懐中に入部屋を立出彼遣書を師匠が閨房の襖の外へ差置て兩戸を開き庭へ出塀を乗越一さんよ赤坂差て行にける孝子の一心弓取の矢竹は逃る星之助足を早めて三河堂ある太田原土佐守が表門まで来りて見れば誰どの知を我より先忍び寄る曲者あるに這の不審と十一日の月の影にぞ照し見れば思ひ掛さき傳助が甲斐く敷も促装てイみ居るにぞ聲を掛汝の傳助々太刀の無用と豫て言るるに何故茲にの至りまぞと問は彼方の首を下け其義の承知いたし居れども如何劍術勝れさる方どの言は傳年も行ぬ和若が傳一個此邸へ忍び入る其節に敵の方に備へ有て取巻れてい一大事故も先立茲へ来り傳叱り有るも返り見づ傳待すしてをりました年の寄たれど此傳助傳屋敷に在る其頃に善兵衛様に教られし太刀筋今も忘れねば昔し取たる杵柄めて一個や二個の助太刀を斷散すこと安けれは何卒傳供を願ひ奉ると言を此方の押返し其眞實の然まどながら過にし頃も言通り助太刀有ての外聞悪く又亡き父へも孝養お成ねば堅く禁めしめて其上汝の劍術に勝れし者にも非れば伴ひ這入其どたの



汝に怪我の有せじと思へば我の意ひかれ太刀筋鈍りて遅れや取ん然すれば汝の足手纏の道理を聞解て之より屋敷へ歸る可しと諭せど毫も聞入あきにな此方の態と言葉を荒くは是程いふも肯さきバ今のとや詮方あし斯まで思ひ立たれども足手纏の有る時の我本望も遂難けれは我の此場で切腹せんと言を聞て驚く傳助待下され若殿様和君に生害させましての。夫での思ひ禁まるの。その言へ傳一個敵地への。夫での生害致さうかと絶に掛たる早即の智恵傳助今の詮備なく如何も思ひ止りませうと言にやうく面を和げ能こそ思ひ止りし我の何道此世にの存命可くもあらぬ身あれば

今こそ汝も紀念をやらんと懐甲つゝぐり金一包出して遞與バ見て吃驚是の大枚金百兩。オ
 、サ我師匠の代禱古を以て金銀衣類に事欠す殊更武士の末期に望み肌附の金持ざるの恥辱
 になるゆへ持合す金百五十兩持參せしが汝に會し幸ひなきを慕参りせし殊勝奇意と敵の
 容子を探りたる褒美とあして取すれば必置なく受納め國へ歸りて田地を求め此世を安く送
 る可しと仁義も籠りし恵の金に傳助今の推辭もなす涙も暮て押頂く中も此所等の往來
 稀よて更ての人跡絶たれと設も人目に掛らば大事とや疾々と急がすにぞ此方の茲に別る、
 を餘波惜くの思へ、情の言葉を破らじと立上れとも行兼る主従三世の憂き別れ哀別離苦
 にかふまれて見返、行過しが岩井の言葉を守りつゝ國に歸りて田地を求め世を安ら
 くに送りしとぞ跡見ぎつて星之助今のとや心安しと思へる節に小蔭より一人の男顯を出し
 能々見れば先の程酒汲交して別れたる小嶋彌六で有しう、道り彌六ぬしか思ひ掛す如何し
 て茲への來給ひしぞと問バ彼方の點頭て最前別れのあしとれと和殿の仇討慕はしく加勢の
 道に背けども孝子の爲に、一臂の力を盡さ、らんも本意あらねば斯々箇様の解ありて今宵
 和殿に助太刀爲すよし委敷記し重役へ宛たる書面を辻番所の我現箱の中へ入置今ぐたやう

やう此所へ來りて見れを傳助を歸し還たる和殿の膽力依て加勢の吾情も思ひ禁りたりけれ
 ども此土佐守の一刀流の達人あして内弟子も夥多ありと聞のらよ和殿渠をバ討取て立退を
 りの跡を慕ひ戦ひ難義も及ぶ可し登時吾情敵を引受安々おん身を落す可し是こそ仇の太田
 原お刃を附ねば助太刀あらざ只邪魔者を攘ふ耳此儀を心得給ひねと事を分る勇士の一言
 星之助のいよく感じ何かう何まで滲心附る、御芳志の程有難し吾情ことも退口の豫て難
 義と心得しが貴殿が有るバ百萬騎の味方を得るに増りし加勢とい言へ此身の其爲に御身
 を自儘にあさなきを吾情故に後々のお祟り有らんも心苦しと言を彌六の耳も掛せ此期よ
 及びて未練を言葉左右する中子の刻近し早くくとせり立れば氣を取直し星之助心得ざる
 と立上り屹度見上る門の中見越の松こそ足代お能と懐中したりし金引を取元を左手に握
 み右手に先ある八角に造し鎖丸取より早く梢を目掛けて投附れば手練の精妙鎖丸の大木の幹
 へ繰々と悉附宛然結びし如く跡ある糸の長き故門の外へと垂たりし是も強き筋糸を幾筋
 とぞく細合せし物ふて有る糸とい言へ金も増りし強み有にぞ夫を足代に滑々と傳ふて松
 の梢まで登り行くる景状の踏鼠羅猴に異らで其早き事目に留らず人間業とい見へざりけり

第十五回

空襲の謀計孝子死地に陥る
闇房の説破衆敵遺書を示す

却説星之助の金引糸に取籠り難なく中に忍び入り糸を外して懐中へ押入秘の幹を傳ひ庭
み降立表門を内より開きてイザと許り言ハ彌六ハ早業に感心おして進み入り吾情此處よて
相待べけれハ首尾よく本望遂給へと言に此方ハ心得て彼傳助より傳入る繪圖を暗記の屋
敷の地の利足音盗んで奥庭へ深くも忍び入にたり斯て星之助の庭面より雨戸へ耳を押附て
窺ふ中の寐入端寂寞として音もあきになシテ還たりと意の勇み繋る竹をバ切取て柱も有す
三間を開放しさる様側の鴨居の敷居の間へ狭め竹の宛然弓絃の如く曲し張に自然敷居鴨
居の上下を張きて雨戸の緩みしに外より難なく一枚を外して室へ進み入り敵の寢所の何處
ぞと窺ふ彼方の一間より奇南の香り腹都と隙間を漏てぞ來るよぞ借ハ彼所の心得たりと屹
と見返る間の襖ハ光琳風の富士の繪も殘る火影に玲瓏と見ゆるハ此方ハ眼を止め此繪を見
ても思ひ出す建久四年の昔昔我同胞ハ駿河ある富士の裾野の假屋ハ忍び父の仇ある祐經
と討て美名を輝かせし其ハ早月の雨の足是ハ霜月雪もよひ昔ハ同胞二人の一心今ハ一人味

方もかく十八年の天津風夫ちらかく十七年今吹返す父の仇假令單身なればとて曾我殿原
に劣らんやと口ハ言ねと意にハ勇み立つ、襖を開け這入ハ中の有明暗く立廻しハ屏風
の中の確お夫と必附き寐込を討んハ死人も全襟眼を覺させ討取んと屏風引開け釣録の夜具
を巻レバ這ハ如何中の裳脱の空にして其人あらねハ大きに驚れ雲時たもとふ其節から向ふ
の唐紙堀と許り引開たりし彼方にハ銀燭映く點し列ね主個太田原土佐守ハ小具足に身を
堅め床机に掛りて優然たる右の方ハ給人の小田切半彌扣ハをり左りの方にハ相弟子たり
し大鳥彦六扣ハひて鏡々整々さる景狀に原來敵ハ用心ありしと呆る、問もさく左右の唐
紙一度に開たりハ右手の方ハ早川同胞郡の三個左手の方ハ齋藤菊池の兩個よて何れも弓よ
矢を番ハ滿月の如く引絞りイザと言ハ切て放ち射止んところ構へたり累ねハこの此爲体殊
にハ思ひ掛ざりける彦六さへも其場に居るにぞ不審ハ毫も晴やハぬ此方を見下し土佐守ハ
ア推參あり星之助乞食非人の身を以て天下の直參土佐守と任官なし、我屋敷へ忍び入しハ
亡父の藤十郎に似て發狂せしか但しハ物を盗まん爲り不届奴めと言れハ星之助ハ眼逆立惡
き雜言傳四郎浪人おせと我もまた天下の直參古川の岩井の嫡子星之助ハ俱不載天の父の仇

たる汝を討ん其爲に今宵此家へ来りしに物取なると言許りり武士を乞食非人とい先汝より
 血迷ひしかと遣返せども打笑ひ思ひ出せばオ、夫よ今を去るまゝと十四年汝の儘に三歳の時
 ゆゑ父を討れし事の更なり乞食非人れ由縁も知まじ是なん汝の母親あるお花々自害の其節
 ふ遺せし一通自筆の遺書是見て素生を知りしと懐中よりして一通を出して此方へ投附れハ
 此方も母の自筆と言れ半信半疑の其上に母の自害の何故なるう今に知こと能はざれば取手
 遅しと書置を披きて讀ば思ひさや師匠に聞し母の素生の偽りにして桐ヶ谷の隠亡非人の娘
 ありと記しあるにぞ大に驚き言葉も更に出ざりけり太田原の莞爾と笑み如何星之助汝藤
 十郎が子とい言へ其實非人の外孫されば乞食非人と言ざりしがよも過言に非る可し然ハ
 藤十郎の非人の娘を妾とあして汝をば擧げざりける汚れよて御前の首尾を仕損じまよりお
 花の夫を我身の罪とし自害せし自業自得然ハ藤十郎も身の非を悔ひ出家沙門とも成る
 可きを然ハ非せして妾の自殺血迷ひしうへ其首を携へ我家へ亂入おし恨む可き解わらぬ
 我を恨んで最期を遂たる者あて有るを父の敵と恨んで狙ふの豕を抱いて臭きを知ざる汝も
 無上馬鹿者なりと羞しめたる一言に此方の母と父との最期今日の前に見る如く言れていよ

く無念の増し假令母が非人の娘あて其汚れ
 お依り父親が不覺を取とも夫の夫を母が自害
 を爲て終了父に子細ハ非るうへ父が不覺も
 母親の汚れと知ハ臆病未練で爲し事に非る
 もの汝の是を臆病未練と言しに依て父の怒り
 此家へ切入給ひしかと急に急たる其故ハ武藝
 未熟の汝の爲に討れ給ひし御無念を今宵を晴
 す我心と刀柄へ手を掛て詰寄るとハ側ある
 半彌の見やりて冷笑ハ我ハ此家の給人あて小
 田切半彌といふ者なるが汝が父の其夜さり武
 術勝せし我君と一騎打かる勝負をさせハ君よ
 過失あらせじと我ハ木の間に忍びて放つ矢
 先ハ藤十郎が胸元を深く射貫しかハ倒るハ所



を我君が忽地討取給ひしかりと言ハ大鳥言葉を放ち一別以來珍し、星之助母の素生と父親
ガ小田切迄の、矢先に掛り死せしを初て聞しより定めし肝も潰れしからんが未だ言聞す事
のあり我の汝に武藝も勝れ年を累て師匠の許に從ひぬれば我をこそ上の坐に置可きある
お然のありぞして師匠の僅の縁を繋りて乳の香失ざる汝をバ上席に置き寵愛させバ心良
らぞ思ふをり日外汝を寝所へ呼び異見の節に身の上をなし目下勢ひ天下に満る田沼の殿れ
御縁者さる太田原どのを討んとする機密を窺らぞ聞知りされバ師匠の許の暇を取り此方へ
身を寄せ注進したるお彼長沼との事變り人を知たる當家の殿其功は愛で吾儕を重く用ゐて
高弟の上お置れて用心なし汝來らバ討取んと斯まで仕組置たるありと銘々實を明しけるに
星之助の聞事毎に怒りの面色をそゝぎ髪逆立て礎と白眼仇の傳四郎一個と思ひたりしが
然にあらで父を矢先に掛る半彌汝も争で生置可き又大鳥の人非人師匠の恩をバ忘れし
耳の仇は從人面獸心汝も共にと白刃を拔バ三個のうらく打笑ひ汝朝比奈の勇力あり又
義經の早業ありとも斯取巻し上からの袋の鼠網の魚いかで脱るゝ事を得ん。其願より切下
んと飛掛るをバ左右より一同に射出す五筋の矢の下潜れば五人の内弟子弓投捨て太刀拔連

切て掛れば心得たりと上下左右に受流す稀代の手の中五個の者共あしらひ兼てぞ見えたる
に小田切大鳥走り出前後七個押包みやらじとこそ挑ける戦ひなごも星之助の心の中に
思ふやふ我輕卒は師匠の教へを破りて茲へ亂入せしし思ひ掛なき彦六が反心よりして敵の
方に用心ありて此爲体さの渠等を一個殲らぞ討ん難き事あらねと寡を以て乘に敵し
難く設し太田原を討漏しなバ遺憾此上有可からぞ殊な敵の一個と思ふにも似て當の敵半彌
と言る者さへ有れば蓋を忍びて此場の一先引退きし再度思案し首尾よく敵を討に如じと
胸を定めて漸々に引退きて廣庭へ出れば跡を追掛る者お構の走刃を退き表門の方へと出
るお待構へさる小嶋彌六夫と見るより岩井氏首尾の如何と問けるお此方の長息吐さぐら面
目なげよ一伍一什言葉短は述たるに小嶋もほつと嘆息さし謀計の人に在り爲しむるの天に
在り斯まで整ひ討入しお用心ありしは是非もあし然は是より吾儕も刀の目釘の續くだけ加
勢をあして切巻り一度茲をバ落延んど言うちよはや七個を先に立つゝ土佐守の邸の中の侍
ひ若黨奴隸に至る多くの人数手お手に得物携へて脱びまじとぞ責附るにヤア物々しき有罪
飯鬼岩井が加勢の小嶋彌六まづ我刃を受て見よと言より早く引拔て簇る中へと斷入たり

第十六回

義士の生命を落し壯士の輕傷を負ふ
全門の孝子を救ひ俠士の番兵を説く

進退越み谷りし星之助も今の一所懸命彌六を討せしと許りに自己も刀をふり冠り敵の中にぞ切入り彼方の夥多太刀鎗にて二個を取巻討取んと競へる脊後に太田原の小田切諸共弓み矢番ひ宛然稻子の飛が如く隙間もあらず切て放すに此方の武術勝れし者か三面六臂に非るも各四方の敵の切拂へと飛道具より敵し難く岩井も小嶋も其身に立つ矢の幾條と數知ねば退ともあしに二三田東の方へ追れ行き但有る寺の門前まで至りて又も戦ひける此時太田原土佐守が狙ひ堅めて放ちたる矢坪の遠りず小嶋彌六が左の眼を愚刺と射しよぞ流石大強無比の勇士も何ぞ溜らん呀と叫び尻居に挫と倒るゝ又シテ遣たりと夥多の其所へ進んで彌六をへ鎗玉小揚げ討果せし無懸といふも魯奇り星之助の目の前にて小嶋を討れ悲嘆の遺方なきまゝ太刀筋も漸々に亂れ行き又敵方の彌六を討しよ依て勢ひ附き脱すまじとぞ實討に星之助も今のはや數ヶ所の手傷を負けれ戦ひいとく難義と成て已に危く見へみけり不題長沼四郎左衛門の威胃のため心地あしと甲夜より己が臥床に入り汗をば取て

寐るるゆゑ夜半の頃に目を覺し廁へ行て又素の寐間へ入んとしる節襖の外ある一通を見やりて不審と手に取上封じを披きて讀下せば教に悖るの恐れ入と俱不戴天の仇あれば今宵彼方へ忍び入り本望遂る心得ありと詳細に記し有りたるも長沼の見て大きに驚き渠仇討の志操の然る事ながら血氣に逸り亂入致さば過失有かん道の此儘に捨置すと仕度もそこそこ杉浦首め止宿の高弟八人を呼びしつゝ此次第を言葉せわしく言聞せ箇様くの解かれれば必定渠の死地も陥り戦ひ難義に及ぶ可し我に續て岩井を救へと言バ一全心得て身輕に促装長沼を眞先に立て揉に揉で三河臺へと馳附り然バ又太田原の我思ふ坪へ星之助を引入加勢の一個の討て捨しに勢ひ附き渠も共にと思ふ所へ誰どの知す八九人の武士の此方へ馳附來り咄と喚て切入たる何れも手練の勇士なれば宛然飢たる大虎の群る羊を驅に似て切先尖く切入バ此方の思ひも依ざりける多勢の助太刀不意の加勢這の何奴と驚きあがら見やれば先へ進みし目下天下に並びなき長沼にして其外のみ高弟にて有たれば太田原を首とし小田切大鳥その他諸の星之助の苦戦と聞援に出一の一人にても持餘したる此所へそれが師匠や高弟が來るべいよく難義ありと心お五分の恐れを生じ敵對ふ勢ひ有らずして切

先亦まるを得たりや應と長沼共に從横無盡と斷立られ多勢の忽地崩れ行き屋敷の方へと通
 踊るふ此時已に夜の明放れ朝日の東の空へ上るに長沼見やりて打驚き我劍術を師範の身を
 以て是等の事に助勢せしを世の人の目に徇る時の家名の汚れ面目さし幸ひ敵も退きたれば
 我の是より立歸ればお身等の星之助を介抱して跡より屋敷へ参る可しと言置自己の立歸
 りぬ跡も杉浦其他の者の負傷お惱む星之助を介抱あして一個の脊も負上れば星之助諸君の
 厚意の謝するにも言葉無れと吾情の豫ての覺悟にひねば此まゝ死すとも怨みし只氣の毒を
 の其所に死せし小嶋彌六が上にして渠が死骸を越お捨敵の土足に掛んこと如何も不便千萬
 あれば何卒是も共々お言に此方も心得て又一人の彌六の死骸を脊負て退き去たる頃夜
 の至たくに明放き三河臺を立出て赤坂門を打越て貝坂へとて歸るおを往來筋の人通り見
 れば屈竟の壯士八人中ある二個の血に染し手負の者と死骸とを脊負るるよぞ這のそも如何
 何事わりしと不審立集ひての器々なすを耳おも掛ざる八個の赤坂御門へさし掛るに此爲体
 で有るおれお見附を守る番兵の通さじ物とぞ辨さけるに流石此方も天下の大法うち破つて
 の通りのね因じ果るる其節うら通り掛りし一個の武士あり是かん黒川佐四郎にて今日しも



朝疾く所用に出今此所へ來りしが見れば吾情
 が劍術の師長沼の高弟と見るに豫て見知る星之
 助を脊負し耳お見知ぬ男の死骸も脊負てゐる
 るおぞ大に驚き立寄て仔細如何と問けるに
 杉浦泰造事の由を言葉短お告たる上今此見附
 を通り兼る仔細を演れれば黒川の或の感じ或の
 驚き左様の事にていひ長沼どの、屋敷へ歸
 りの後の事とも心元なし死骸諸共星之助を一
 先拙者が許へ引取後に爲す術幾干も有可しと
 言つ、見附の番所に入り是等の者の吾情の朋
 友にして少しの事より斯の負傷を致せしかと
 素より善らぬ行ひある者にて決して之無き事
 の吾情保證仕つれば御見附通し下さる可し

斯す吾儕の赤坂桐畑ある黒川佐四郎とす者ど實言虚言うち混て眞實らしくぞ演たる上
此黒川の妹お樂の目下御本丸に奉公なし御手附中老を勤めて飛鳥落す勢ひなれば見附番所
も黒川と聞より何でう違背ある可き真と心得阿容くくと一全をば通しけるに佐四郎の首尾
よしと先一同を我家に誘ひ彌六が死骸の佛間へ入れ又星之助に醫師を招き手傷の療治を
させにたり諸も八個の者共の屋敷へ歸りて云々と途中の事を演たるに長沼聞て黒川が師弟
の義をば重んじて危き場所へ立入のみう先を見抜て我屋敷へ死骸もろども星之助を伴ひ呉
たる有難さよど其深切を喜ひける案下某上再説太田原土佐守の已ま星之助をも討んどせし
に思ひぬ加勢に追立られ引返きて取脱せしに遺憾やる方ありければ夜明るを待ち其筋へ
出で昨夜の次第とば断へあして長沼まで加勢を致してひひしと言しよ捨置難しとて四郎左
衛門の呼出され洩調受しが吾儕も岩井星之助といふ弟子ありしが先づ頃破門して今の道場
も在らざれば然る行ひの有しう如何を毫も知由ひはず又吾儕が門弟共を引連加勢を致せし
ちとどやすの跡なき虚言にて开を見止るる證人なしよし又有と致せども夫の太田原の手下
の者もへ證據とするより足ざる可しと最潔白に演ければ其筋にても疑ひ解長沼の其儘歸さ

れ太田原の粗忽ある跡へをなせしとて叱り置れ口惜く思へども他に證據も有らざれば詮方
なくてぞ引退さぬ斯て長沼の屋敷へ歸り上向首尾よく爲しかど借此上のせん様ひとつ一個胸
をば苦めぬる其日も已に暮合頃立關へ來し一個の武士吾儕こその上杉家の留守居役山田孝
平といふ者あるがチト節入て御主人へ密々やし上たき事の有て参りていへば此儀洩取次下
されうし言ハ小侍心得て主個に斯と通じけるお長沼の上杉家と聞より是の彌六の事にて
來りしあらんと心附き一間へ通して對面あすに山田の此方より打向ひ吾儕わざく参りしハ
余の事あらま當家の足輕小嶋彌六とやば者此方の内弟子岩井殿と箇様くくの解ありて一面
議の義に依て昨日面會したるをり仇討と聞き一書を遣し立出たるも知ざりしが後に認て大
きに驚き上役を経て主人少彌お言上せしに主人の見て謙信以來武勇を捨ざる我家に在る足
輕づけ義を見て勇む志操感心の外有らざるあり早く安否を知らしと夜明を待て太田原の屋
敷の邊を窺ひするに早事終りし後おれハ人氣もあらま行方も知ざる物くら風聞に傳承れハ
小嶋彌六の其場に於て討死せしよし設し是れ眞にいひし如何も不便の者おれハ死骸を引取
竊のに埋葬致さん主人の素志向卒こゝを推察有て包す御救下されかしと最懇懇お述にける

第十七回

長沼の屋敷に山田君命を演ぶ
米澤の城中に岩井其身を寄す

登時山田孝平の再度長沼の打向ひ是の彌六が遣せし一通は見て御思案下さる可しと懷中よりして一通を出せば長沼受抜きつゝ讀でうち黙頭先頃狼藉者も出會しが小嶋殿の情も依り故なく其場の過しとして渠星之助歸りし後話したりしよ吾儕も義氣に感せし事有し此文体で見ると時を主を持身の一度の思ひ止りなごふにも義氣の溢れて一書を遣し助太刀をして其場にて敢なく生命を落せしこと惜むにも又餘りあり然るに御主君にも之が生死を御存知有たく死かば死骸を葬りたしとい流石謙信公の御末葉武勇を尊び臣下を憐れ思し召の程感佩せり故に何事も包み藏さざれば話し致しいとんと自己の星之助が遺書を見たるより門人を連れ危急の場所へ臨みし節も小嶋のこや計れて跡の岩井一人敵追散して退きしが残る門弟の星之助と死骸を背負て歸る途中箇様々の次第ありて生死二個の黒川の屋敷に在て自己への御調べ有し夕辨に任せ如此言て歸りしかど斯公然に成りても行ての義士の死骸も引取衛なく孝子の弟子さへ呼取難く心を苦惱居し所ろ和君の御懇情拜承り喜びの外いとす

宜敷願ひ奉と言は山田の膝を進め原來二個の黒川殿の情に依て彼方なるか夫に附ての協議ありとも小嶋彌六と言ふの幼稚時に父母も別れ孤兒としも成たるを吾儕憐れ救ひ取て足輕勤を爲せ置しが夫なる彌六が加勢せし星之助殿を此まゝに置も便なき事といひ且太田原の勢ひ有る田沼主殿が親族なれば此後岩井氏を隠し置ば黒川氏あり貴殿ありを謔言おして何様も災害有んも計られねば小嶋の死骸諸共に星之助殿も我方へ引取國元出羽表の兄山田三左衛門方へ送り届けて隠し置き時節を待て再度また復讐爲とも遅くは有らじ此議の如何と問けるも長沼のよく感入り但何事も宜敷やうと答るる中に日暮たれば片時も早く山田の立ち長沼誘ひ黒川の屋敷をさして行をり人目も立を厭ひければ我乗來りし竹輿の釣せ歩行を運びて行よける斯く二個の黒川の屋敷へ至り情の程を深く謝したる其うへに思ふ事さへ演るるに佐四郎の上杉家の義に強くして長沼が岩井を捨ざる義心を感じ星之助を呼出すお是さへ深死傷ならねば然のみの勞るゝ色もなければ其所へ來りて傳助より繪圖を得しより意逸り忍び入し敵方も用心ありて箇様々日外のこと立聞せし大島彦六彼方に在り又父上を遠矢よ掛し小田切半彌で有しこと迄委細話せ母の素生の流石に

蓋て明しもせず教に焼けて漫り過失なる上彌六まで討せし罪を悔ひ嘆くを長沼然のみ
 一叱りもせず彼大鳥の不義を怒り彼奴をくんば我教と破ると言とも討可かりしよと他ある
 二個と顔見合せ嘆息をして居たりしが漸々言葉更めて斯仕損せし上ららひ今言しとて詮
 方ありれば汝の是なる山田殿に其身を托ね米澤へ至りて雲時忍ぶ可し其中此方に太田原を
 討可き時機の来りと思えい内弟子の中一人を彼所に下し迎へさせられ其時本望遂るぞ能々
 れよし又彼方又年を累ね日を累るとも長きに飽き再度逸る事勿きと吳々意見しうりに星
 之助のたゞ感涙に咽びをりしが首を上げ仰一々心得侍りぬ此度に懲り此後決して仰に悖
 らじと言に山田も黒川も意に安堵し孝半の我乗物へ彌六の死骸を昇入させて星之助を伴ひ
 出れば星之助主個に深く禮を演師匠も暫時の別れを告げ上杉家へとて至りける諸も山田の
 踊ると其まゝ今日れ容子を言上なし罪得がましき業ながら星之助をも伴ひしとやし上るに
 上杉殿開の能く心の附ふりし汝よろしく計ふ可しと御機嫌殊も能りしうり山田の心得御前
 を下り其夜の中に彌六が死骸の全家累代の香華院なる淺洲新鳥越の寶藏院にぞ葬りたる此
 時星之助も棺を送り涙を流して回向せし其明る朝孝半の國元の兄宛て一封の消息を認め

そを星之助に遞與つゝ道案内として小侍ひを一人附し星之助の旅促装を整へつゝ江戸を
 立出七十五里の道へ掛りて夜に泊り日に歩行連れ日を累ね米澤城の中に入り山田を訪ひ消
 息を出して來由を告げるみ三左衛門も弟の書翰と本人が言ふ所に依りて委細承知し彼方よ
 留め小侍に星之助を預りし旨認る返書を遞與て歸しける去程み三左衛門の星之助をバ
 此儘に差置んこと家中の聞え且の仇敵の方へ漏るや面倒されば姿を替へ名を改むること宜
 る可しと言ハ岩井も承知して夫より其身の此家の若黨とあり其名さへ中根善次郎と假名せ
 しつ亡き善兵衛を意の中に募て号し物ある可し斯て其年も果敢く暮れ翌天明四年と成た
 るが此年三月二十四日江戸番町麻谷に住む旗本新御番五百石佐野善左衛門政言殿中よ於
 て若年奇出頭たる田沼山城守を刃傷に及びしり善左衛門の其所より網乗物にて直に町奉
 行所へ引渡され時の町奉行曲淵甲斐守意恨の主意をバ調べられしに只自己の恨より刃傷お
 及びし様なきと此山城守の父の田沼主殿頭と言僅一萬石の大名ありしに近頃登用せられつ
 五万七千石の高祿を賜り老中出頭を勤をり父子相並んで當路に在れば政治を左右し運上
 を重くおしつゝ民の困苦を思ひやりざる舉動多きに善左衛門の天下の爲とて其身を捨てま

お息子の山城守を討て捨しとい言すして明かあれども大法犯せし者あれば是非なき事とて今年の四月三日に善左衛門の傳馬町なる石出帯刀が半屋敷の廣庭にて切腹仰附られし可憐英士を卯の花と共に散す便あけれ此時善左衛門二十八年死骸の夫が香華院ある淺井東本願寺地中神田山徳本寺に埋葬し元良院釋以貞居士と号せり然バ子の討れても其父繁昌し威權日頃お變りされど奸を除き英士の徳自然と顯れ田沼が死せし其後の米石諸色の價格のみを漸々に下落を告げ市中の民の消光の助とある事いとく多ければ雖言どもなく善左衛門を世直大明神と尊信し我もくと徳本寺へ參詣あして職を捧げ額を獻じて歩行を運ぶ其人引も切ざる程の賑ひなきバ其名の死後に高く聞ひて此事もとや米澤まで聞ひければ星之助の跳り上つて大さよ春ひ田沼の素之れ不正の人物僥倖にして登用せられ今日の榮を見あれども積悪の家餘殃ありて山城守已に討れぬ去バ遠うらせして主殿頭が上にも及ぼし威權落ちん然すれば太田原も勢ひ削きて我宿望達する時の近きに有べし師匠の音信待にの如じと思ひ定て居たりたる其年も已に春去り夏すぎ秋も中旬に葉月と成て今日の即ち十五日月見日となり成たるに主個山田の中根くと星之助をバ近く招き君の伊家の嘉例にて

昔しよりして毎年の八月の十五日に城下盡れれ宇佐八幡の社内に於て飛入勝手野試合有り是の舊例を用ゐる故機敷を掛け溜む構造城代長尾權四郎殿を首として家中一同見物に出る許りり武藝を顯し勝を争ふ事なれば又見物も多くあり吾儕も元より劍術を好むが故に毎此試合に出勝を取る事の度々有し今茲も出んと思ひしが先の日よりして殘暑に中らる心地快らず引籠りしが今茲に限り行ざらん例に外ると如くに思これ必お掛りて安うらねと假令試合の爲せもあれ單八幡へ參詣なし景況見んと思あれバ和郎も俱して打見よらしと言れて喜ぶ星之助主個お從ひ行にける

第十八回

武術を誇つて和志塚敵手を帯び
力量を顯して星之助九平を懲す

夫れ米澤の城下ある宇佐八幡と聞あし神殿美々しく境内廣く當國一の神垣あれバ常の參詣引も切せ殊更今日の古へよりの嘉例に依て野試合あれバ四方は機敷構造て夫が外よの餠菓子餅や餠賣る店も酒賣り店も所狭まで併べ立最賑ひて見えにけるをもく野試合と言る者ハ則ち素面素小手の擊劍會なり當時劍術流行して武家の勿論農工商とも武藝を學ぬ者

も非ねバ稍ともすれバ怪我過誤の多く有ゆる政府よてハ面小手其他の道具を附す試合を爲
 を禁じたれバ素面素小手の立相ハミテ野試合と稱しける閑話ハ休題ツ其日山田三左衛門ハ
 星之助をバ從へて先八幡宮へ參詣おし夫より機敷に打登り勝負の容子を見物なす宵後又扣
 へし星之助も四邊を見れば正面にハ城代長尾權四郎を首とあして家中の武士數を盡して見
 物おし下下にハ貴賤老若男女我もく膝を交る袖を列て其所に坐し片唾を吞で見物なす試
 合ハ飛入勝手次第と言ことなれば一番終れば續いて一番初ツ、閑なく見ゆる面白さに勝
 る者ハ敵手を換へ幾個とあく立合て其場を退く事さ程聞しお増る盛況おれば星之助ハ只
 管ハ勝負を望めおるりけり此時米澤の近習おて鷲塚九平と言る者竹刀を持って出るより僅
 中に三十九人を撃倒しる手の中に充滿しる人々の神り鬼りと計りおて顔を望めて誰有
 て敵手に成んど言ものなし九平ハ真中お衝立て如何方々已に見らるゝ如くにて三十九人ハ
 勝ハしたれと勝負ハ時の運あるもの我手の中を暮としくも思へる人も有んよ然のその怖
 き此所へ來りて一手試み給へど大音聲おて傍若無人に響りしかを手に懲り我立合んと立
 出る者もなきにぞ然もあらんと九平ハ高慢の鼻をひて附せ四邊を吃と見返れば向ふよる

ハ山田三左衛門渠平常より劍術ハ執心深く能く用ひ家中よ於て評判の者にて有れば斯ま
 であ勝を取る其上に渠をも負さバ我名ハますく世よ高くおを聞ゆるおれと早くも思案
 し吃度見て其所なる機敷居給ふ山田氏と見受さり吾儕已に三十九人に勝を取る其後
 も腕ハ未だ納らず故お見物の人お向ひしばく勝負を罷れども我手並みや懲りにけん誰一人
 も出會て試合を爲んど言ものなし就て吾儕が見る所貴殿の外にハ我敵手に成可き人の
 有とも覺るぞいさく來りて一本を試み給へど竹刀を揚げさし招くにぞ三左衛門先の程よ
 り鷲塚が人もあげなる舉動を見やりて心中怒りを生じ身軀に恙あらざれば出て撃可き者お
 るを怒りを堪てわたりしが今竹刀をもて差招うれ他の見る前猶豫あり兼立上らんとする
 所を星之助ハ雲時と禁め最前よりして彼漢ガ傍若無人のあの舉動僅の手續を鼻に掛け高ぶ
 る所爲の憎ければ吾儕出てたゞ一撃にうち挫んど存せしお和君の御許しおさ中ハと扣
 へ居し渠はよく增長おして差招く憎くも所業捨置難し就て和君ハ御病氣中設萬一の事
 あらバ後ハ悔ども其陰おければ渠奴ハ吾儕に任せ給へと言に山田も星之助が武藝ハ兼て聞
 知いれバ忍地承知し其方能に計へかして言ハ星之助心得て機敷を下り仕度を調へ竹刀携げ

進と出れば驚塚九平是を見て山田氏にと言たるに汝の彼所は若黨の原來山田氏より我手並に怖れをかし汝を出して退きしか武士に似合ぬ卑怯な事と言ども岩井の懇懇に主人三左衛門こと伊招きに預り一手御指南も受可きあれと其仕度を教すうち只徒らに伊手を明させ我君を伊待せやさん事無禮の次第にいへば主人仕度を致す間若黨中根善次郎望んで伊相手致しい何卒一手御指南を願ひますと云げれば驚塚呵囉く打笑ひ是が試合で有る能はれ敷し戰場ふて敵將に差し招かれし其時ふ只今仕度を致す間と其老黨を代りに出すなと猶豫致さば自己の首の幾個有ても足ざる物を然との氣永き山田氏世に馬鹿くしき限りあれ共夫の兎もわれ角もわれ年端も行ざる未熟の身を以て今吾儕と立合とさ其筋骨も必ず碎けん然の然ながら主と代り吾と立合とさといふ其心根が殊勝なを伊隨分ともに手柔く指前致せば伊ザ來れと誇り又誇つて立上れば心得たりと星之助も竹刀を構へて立合ける眼を注ぐ夥多の見物先の程より驚塚が其廣言を憎むて誰人あり共立出て彼を撃ち心地よかふんと思へる中ふ山田の若黨中根と出る者出て今立會の初しうと九平の年頃三十五六身幹六尺有餘にして肥油附き色黒く熊鬚生て眼尖く造り損せし二玉の如く見るに引換中根と

いふの年未だ十八餘に見ゆ色白くまて姿優しく女の如き美男なれば今驚塚と立會様の荒鷲に會ふ小雀の喙まれせん景状あり去程に此方の二個の頼み竹刀を交る物うら九平の中根が柔弱なる姿を見やりて只一撃と思ふにも似て手練尖く前を拂へば背後に隠れ背後を打ば前に出前後左右を飛巡り敵を傍らす妙を得し是長沼の小天狗と呼れし勇士が種代は秘術此方の案に相違して侮り難しと思ひつゝ精神込で戦へば何果べうも見へざりけり星之助の眼を入と思ふがまゝに敵を勞しとや能頃と思ひしかば大喝一聲竹刀を揚げ九平の右の腕をバ端と許りふ打たるに何ぞ溜らん腕さ痿き竹刀を憂理と取落せり然れども九平の此負を道具落しにあさんと思へば大手を廣げて武者振附を心得たりと竹刀を捨四つお組で揉合しがやと聲掛て星之助大の男は驚塚を目よりも高く差上て見物の方にうち向ひ人々勝負の見ゆるのと言より早く砂をも埋と大地へ控とぞ投附たり此体を見て夥多に見物力量といひ武藝といひ世に勝れたる手の中よてさこも手強き驚塚を事の見事と投しこと天晴ありと思ふより爲さうや爲たりと一合の巻し喝采は其聲の社内に滿て雲時の鳴を止めせ棧敷も揺めく如く見ゆにける驚塚九平の口程にもさく最見苦しき負を取腰さへ強く打たれば面目なきこと

其痛みの強さに依て起も得ず顔を隠してゐたりしが稍々にして起上り宛然鼠の遁るが如く頭を抱て群集に混れ何處ともなく遁亡たり今朝より夥多の勝負ありて此時已に日も西山へ傾きしに依り今日の勝負の早是迄とて終りしよを見物のみち己が隨意家路を差して歸りながら中根の手柄驚塚の不覺を各自喋々あし最衰しくも話しける星之助の塵打拂ひ機敷又登りて三左衛門に會ひ地方の莞爾お和郎の武藝の像も實地に見るの今日が初て劍法のみかの力量まで驚き入る今の舉動吾まで面を起したるの實お喜ばしき次第なりと響れば此方の手を支へ吾儕武術は勝れたる解ならねども時機に就ひ勝を取しに當坐の面目は豫り汗顔の至にいと身を謙遜少しも高ぶる景色ささみぞ山田のいよく頼母しく思ひ居たる其所へ城代附の若侍走り來りて言るやう御城代にの貴所の若黨中根とやふんが手の中を深く賞され親しく呼酒盃やり度思ふより山田氏にの全道にて是より屋敷へ涉出あるやう涉願ひやせと吾儕にやし附られ歸りたれば是より其者全道にて屋敷へ御越下さる可しと思ひ掛さき上首尾に山田の素より星之助も大に喜び有難き旨を答へてイヤと許り案内を爲す若侍の跡に従ひ城代の長尾の屋敷へ行る後の話しの如何あるやらん開の又次回お解分るを讀得て看客知り給ひぬ

第十九回

宰相を感せしむるの一首の詠歌
弟子を勵ましむるの長途の使節

去程に山田三左衛門の星之助をバ誘ひて若侍の後より附き城代長尾が方へ至るも此時全く日暮たれば主個の南面ある書院を開きて風を迎へ酒肴を備へて二個を呼び中根が今日の働を稱して類は酒盃を薦めたる上其が素生も聞か欲とぞ問けるに山田の包も悪ゆる可しと思へば本名星之助とやして江戸の麻布古川岩井藤十郎が息子あること吹上のこと不覺のことお花の自害藤十郎が最期の事より中根が忠義一風軒がこと長沼がこと彌六が義心仇討を仕損じたりし事より更なり大鳥彦六が反心みて彌六の討死黒川が事まで委細演るに長尾の聞て小膝を打吾野試合の其節中根の手續凡庸ならずと認定たるより呼寄て聞か斯まで由緒あり又大志ある者なりしう情のいよく頼母しければ是より吾儕が側に置き及ばずながら教授致せば此旨心得おる可しと最懇切お言われ山田の箇様相成り吾儕が方に在より岩井の幸福此上なしと禮を演れ星之助も深き惠を謝しにける斯て酒盃の坐中を巡り

各自酔を催して其夜も巳に二更近く成しに依て三左衛門の酒盃を辭し別を告星之助が上何くれと頼聞ぬて退りけり斯りし後に星之助の此方へ身を寄せ近習とあり消光をる也へ渠こそ山田が家の若黨ありまが宇佐八幡の社内にて鷲塚九平に打勝る手柄あり依て城代の意に就ひ彼家へ呼取をゆき近習と成まが美男の上の武藝が能ゆへ斯る出世も有るあふんと米澤城中此事の噂のいと高のりけるが星之助の此方へ來りて四年の月日を送りつゝ天明もとや七年どの成しりて長沼方より何事も音信なき敵の容子且夕心に掛りぬる其年九月の中旬ごろ杉浦泰造江戸より來るも三左衛門の星之助が城代長尾の許にぬる事を演れ杉浦が左様御坐らば御全道やして委細を話しやさんと言に山田の杉浦を伴ひ長尾が方へ至るに江戸の安否の聞さけれと岩井の更あり主個さへ其場へ出れ星之助まづ杉浦に一別の後無事を祈しつゝ、法師匠様より傍變りなきやと問ハ泰造先生に傍變りも亦く此度の其傍使に參りしされ星之助の各位様もまづ一通り傍聞遊をせ豫て天下も忌憎まるゝ田沼が息子山城守去る天明四年の三月佐野善左衛門に討果されぬ然れば親の主殿頭の遠慮も爲可た所あるも然り非ずして老中を勤積さてゐると言も惣じ遠慮を爲と時ハ惡事露顯の端

あらんと根強く謀し物なる可し然る上にても田沼が悪事の往々聞し召れしより取調せんと思ふ中先將軍家治公に御不例重せ給ひつゝ、竟も昨年九月八日御年五十七にて御他界まし申し當將軍家齊公御代まろし召す事どの成ぬ斯る御取返の有につま田沼が罪科も其まゝ、お月日を過しぬるうち家斷絶と成なりし佐野善左衛門が妹お秋由緒を求めて水戸家の老女村岡とさん呼る者の召仕となり素生を包み一擧一動漫戲を旨とし廊下などで鞠子の洞入洞返り種々の戯れなすどさの他の女中等の是を見て腹を抱て笑ふ體例も高くぞ聞ぬけるに水戸の宰相晴保卿一日これを聞咎め渠の何ぞと仰有まは傍附の者の箇様くと言上なすに開可笑此方を呼との給ひて直御目見得仰せ附らば多くの女中諸共に御酒宴の興を添奉に容儀よき上糸竹の調の節も拙うす唄ひ舞なす景状も優しく見えしに晴保卿此度の歌を讀よりしと短冊出せば辭する色なく「うきりなき君が爲にと折る花の時しも分ぬものにぞ有ける」と手跡歴しくか記して出しに晴保卿つくづくと打見給ひ其秀才の程に感じ御機嫌殊に斜ならず頼て願へ立給ふをり他の女中達の連絡は老秋供せよと只一人召連絡ひて願へ入り用事を果て出給ふにお秋の氷を參らせたるうへ實吾情の佐野の妹是御覽じて

下さるのしと豫て認め貯へたる一封の書を捧るに晴保卿の然も有可しと受取其文、懐中
 なし素の坐敷へ歸られて何氣なき体ふて酒宴を終り後に一封を開き見るに是亦善左衛門
 が遺書にして田沼の悪事十一ヶ條記しあるもぞ大きに驚き原來の政言其身を犠牲とし先大
 害の山州を討て捨たる事されば主殿も安穩ならし物と思ひあかすも天下の爲に一書又遣し
 其妹の英明才智我に近附捧たりし、天晴同胞能ころ爲たりと心の中に大きに響め直に其書
 を持參して上へ御披露有しかば御評議の上去る八月二十九日老中出頭松平周防守との、
 屋敷尾田沼主殿頭を呼上大老井伊掃部頭直幸とのを首め御老中若年寄月番伊側衆兩町奉行
 勘定奉行等列坐して悪事を一々糾さるゝに上の權もて世人を虐げ民の財寶を掠るど
 う邪曲の行ひ願れ掛り夫より後も度々の御調べありて田沼が身は只是風の前なる燈火勢ひ
 盡て評判悪く昨日まで今日までも皆阿諛て縁を結び親類を成り縁者と稱し犬の如くに尾
 を振り遣入込もの多ければ門前常に市を爲しが田沼の末路近きも在り是が縁者もそれく
 ん御咎あらんと風聞させば今迄諛ひ行ふる者も其身くの祟を怖れ俄お縁を切ものわれば
 今の音信る人もなく門前寂々々々とし家中の者も薄氷を踏が如きの想ひあり就て田沼の陰

をもて土佐守とまで任官せし太田原傳四郎も首尾悪く且の彼方へ稽古に行は如何なる祟や
 あらんも知れと多くの弟子も師匠を見限り下りし者も少からねば此道場の竹刀の音絶て稽
 古の景状もかし是等を知し先生の茲ぞ岩井が仇敵を討可き時の來りしなり落着を待ち呼取
 るに返るゝ事もある可けをば汝米澤へはせ下りて此旨委敷傳へし上星之助をば連絡れ猶書
 翰をと思へども機密に渡る事柄を記して途中は過失ありば後に悔るも及むねば特と消息の
 添ざるのしと事巨細お言れまのば夜を日に繼で参りまど一伍一什を物語るに星之助の是を
 聞き手の舞ひ足の踏む所を知ざる途に大きに喜び天運越ふ願還して多年の宿望果す近
 父母の元より小嶋氏が亡き魂をさへ慰めん是も師匠の高恩と江戸の方とを遣拜おし打喜ひ
 てのたりけり長尾山田も田沼の一條然も有る可しと點頭て杉浦の長途の使を勞ひつゝも酒
 肴を薦め山田の星之助が此方に在ての手柄長尾ぬしが厚意の程を話せば泰造も岩井の爲に
 主個に禮を演よけり斯て杉浦の其夜より山田の方に止宿して星之助の仕度待よ是さへ別
 にむづかしき事にあらねば中一日にて用意全く翻ひしつゝ長尾の其夜別盃を開き首途を祝
 して進めたる次の日岩井の權四郎にも三左衛門にも是までの恩をば謝して杉浦を伴ひ江戸

をさしてぞ立出けるが日わらせ爲て貝坂の師匠の許へ歸り來り五歳ふりにて對面なし委細
のここの杉浦氏より傳承てい何が何から何まで残る方なき御恩の忘れぬとじと言頼つくく
打見やり僅五歳會さる中も情もく立派を男にのあり似たり夫で定めし武藝の程も思ひ
やらきて最頼母しと言バ添より泰造が彼方に在ての一伍一什話せバ長沼笑坪に入り然もあ
らん然も有可し和主を越へ迎へ取るとも以前の事ハ年立て今ハ噂をする者も有くねハ斯ハ
計ふ者より大事を抱し身なるゆへ本望逐る夫までハ猶よく忍びて居こそ能かれと意限なく
既示す實も得難き義心の程に星之助ハい有難涙よくれ合告る鐘の音を聞てぞ己が居馴染
し部屋の内へぞ退りける

第二十二回

諸侯の仁愛妙は機會を得る
曉天の降雪急な警敵に迫る

壯士の孝心天に通じ佐野と田沼の一條より敵の方へも影響を及すと聞き迎へたる其長沼が
屋敷に在て一日を千秋と星之助が容子を窺ひるたる中ハ數度の調の其末に老中田沼主殿頭
が積悪判然あしたれば其年十月初めの二日所領五万七千石淨取上にて主殿頭ハ下屋敷へと

整居にあり一万石を更めて下し給りよりけるハ是あん上の慈悲にしてともく田沼主殿頭
の父新左衛門と言ぐるハ松平左京大夫どのハ家謀なりしが八代將軍吉宗ぬし紀州家より本
丸へ入せ給へる其に節御供仰せ附られて六百石をバ給とりしが其とき主殿ハ龍藏とて未だ
部屋住で有りしところ享保十九年三月十九日召出されて御小納戸を仰せ附られ淨切米を三
百俵下されつ夫より退々立身せし者にて有るハ此由緒のあくんハ家名断絶もあす可き所
先君の寵臣なればと僅にても立置るハぞ鴻恩なれ(記者伊東專三ハ佐野田沼の一條ハ本
傳の主眼とする所ハ非ず殊に此件を記しハ物の本ハ江湖に夥多在來りて又今更に書記さん
ハ最くくしく思ふより只太田原に關係ある所のみ僅に抄録して本傳の助と爲せり然
れハ敢て首尾の全きを欲せず又敢て之ハ詳細をも説かず看官訝る事勿れ看官粗漏を咎るな
れ)却説主殿頭が影響親族縁者及ぼし是に由縁の者其のみあくハ所領半地とあり彼太田
原土佐守も所領半地と任官の土佐守を取上られ素の傳四郎と復命し平層従どの成にけり然
ハ長沼師弟の者の敵の勢ハ斯盡たさバ討取んと近きハ在りと夫が容子を窺ふに主個の落
目を見るよりも内弟子大鳥彦六ハ之を見限り武者修行と号して其所を立去しと聞より夫ハ

遺憾ながら當の敵の小田切と太田原とだに慈なく仔細あらじと思ふうち志州鳥羽の城主松平左近將監の老中の中に筭まへられ武藝を好み長沼を師として學ばせ給ひしが田沼が讒にて先づ年其役義を廢られて國より引込整居せしが此度田沼の役を離れ平大名の一万石と成しに依て鳥羽を以て疑ひの解け召出され再度役義を着され開が喜びをよさんとて四郎左衛門の霜月上旬三番町なる鳥羽どのが屋敷へ伺候し出府を買し再度役に着せ給ひし喜びかんとをやしむるに鳥羽どのも久々よて對面なすを喜びて酒をだし待遇給ひ其後の無事を問せらるゝ事の序に星之助の如何なせしと問るゝ物から流石に夫と明しかねて猶豫をなせば打笑ひ渠のあん身が秘藏弟子にて我方へもまたをりくゝの代稽古に來つ心根も能く知つたりし者あるを包ひ反つて要なき事なり疾疾仔細を明されよと問れて長沼包もなふねば渠が素生の言も更なり父が横死の事よりして中根が次第小嶋がこと最初仇討を仕損せしこと米澤の始末太田原が不首尾に依て呼返し隙を伺ひある事まで委敷言上したりしに鳥羽殿聞て何つと思吐き原來の然いふ者なりしが然らば首尾よく仇を討せ藤十郎の妄執も晴させたくと思ふかしハテ如何がなと思案なしゝが漸々よして礎と手を拍夫の屈竟の事こそあ

を當將軍家齊公來る十二日に川崎の大師河原に御成ある其下檢分を十一日に遣ひす者を誰とも未究らでゐるを僥倖あれバ明日出仕し傳四郎を夫が役目に任すべければ歸途を待て足場を計り多年の宿望晴さる可し這のこれ吾儕が指揮する解ならねどもあん身と我の師弟の契りある上の星之助とも又因あり義を見て勇の一言あれバ努々秘て人にを語ると密告れバ長沼の諸手を支へて恭しく最有難き其多言葉渠が屋敷へ斷入て討果さんこと安けれども先途の如きの要慎あらば再度不覺を取んもうたてて専ら渠が外出を窺ひわたるお下檢分と言ハ節よく人数も甚しいかで其日を外す可き千金も増と君の賜物疾く返りて星之助よも語り聞せて喜ばせんと禮謝を演て屋敷へ歸り諸星之助を近く招き今日斯々の次第めて箇様くの機會を得たり其十一日も中一日即ち明後日と成似たれば用意をせよとを言けるに星之助の始終を聞き跳り上つて大いに喜びそもく十一月十一日の亡き父母の祥月命日此日よ本望遂んこと希ふてもなき僥倖あり殊に先途の如くあらで途中の不意を討よわれバ此度の勝利疑ひなし之と言ひも先生が御餘光に依る吾儕が幸福いと有難くいと演たる上に又いふやう此事はしもじき父母の耻と成ゆる今日まで包藏していひしが仇討の場も臨み

しをり設運拙くして討をさす斯まで鴻恩蒙りたる和君も知で過給とんを遺憾と思ふ其爲に
 今こそお話中さんと日外太田原へ断入るるをり箇様くお説破さる母の遺書をバ示されて
 初て知る其素生自害の事も推察せしと一伍一什を演けき長沼聞て且驚死且の感じて小
 膝を拍ち偕の斯いふ解ありて汚れに依て仕損じまにお花の自害なしるるを暫し言葉もさ
 かりしが此方に向ひて容を正し此事口外はるるときに亡き父母の恥のみあらで和郎の恥とも
 なるまとなれば必ぞ口外に可からずと堅く口止しりしう星之助も此事の生涯口へ出
 さりしと却説長沼の此度の吾儕後見して仇を討せん意され岩井と共に仕度を整のへ心
 願の旨ある故に今日の川崎大師へ参ると言こしうへて十一日の明寅刻まへ屋敷を出しが此
 日や冬の中甸とて昨夕よりして風烈まき雪さへ頻に降出し立出る頃此首も彼首もみも銀
 世界と變りゆき寒さも増る横雪吹を物ともせざる師弟兩個合羽を纏ひ高輪まで道を急で東
 禪寺前に小隠れなして待るたりぬ不題太田原傳四郎の田沼が事小て首尾悪く其身の安危を
 計りうねるたる所へ鳥羽殿の執成に依り川崎御成の下檢分の大役を仰せ附られたりなる
 に其喜びの言ん方なく此役目をバ首尾よく爲バ再度任官はる事もやと思へバ意急がきて夜

明も待を寅刻まへ雪を犯して馬に乗り小田切はじり五人の高弟若黨奴隸草履取併せて九個
 引連て各自義笠身に纏ひ雪道打して高輪まで来りし頃寒氣烈く手足も纏り行惱む東禪寺
 前の小隠れより衝と顯れし二個の男これが前後を狭め小田切半彌早くも聲かけ義笠をもて
 面体を包ちがらよ我君の前後を構む怪の兩個とも此君を誰とくする天下の直參太田原前土
 佐守が川崎御成の下檢分に参られ給ふ途中あるに無禮があらバ用捨の成ぬぞと言バ兩個冷
 笑ひヤア魯やな小田切半彌太田原とい知しゆ先程より待ておつ今を仇をバ撃我々岩井
 星之助長沼四郎左衛門を見忘れしうと言つ、兩個義笠をのなぐり捨て仁王立衛立上りし景
 況の威風凛々々々とし四邊を拂つて見ぬけるお小田切首め一全の思ひ掛さき此敵に呆れて
 言葉も出ざりけり太田原もまた一方なう驚きながら事ともささず先途の不覺も懣もせ
 で執念く我を恨む馬鹿者一度跡を埋めたる其星之助が曉天に稀に出たる小冠者の尻押をさ
 す白痴の長沼下檢分の役義を擔ふ我行先の邪魔を爲の取も直さず御成先よて亂法働く者も
 全じ故も兩個引包んで首を落せば覺悟させ飛で火に入夏の虫と言ども汝等ハ雪の日の飛で
 消るか我前に出しハ不便の者ありけりと大口開いて言り附け鎗持が出す長鎗を取より早く

鞘を拂ひ小脇にのい込吃度見て雪に閃めく穂先をバ此方へ向て寄バ突んと身構へ爲る此
場まの勝負しやうぶの次回じくわいふ至て詳細しゆじゆ成可し
新説曉天星五郎前編下巻尾

明治十七年五月廿八日翻刻御届
六月 出版

前編上下二冊

定價金三十八錢

原板人

東京府平民

吉井幸造

神田猿樂町三丁目一番地

翻刻出版人

井澤菊太郎

芝區愛宕町三丁目五番地

- | | | | |
|---|---|---------|--------|
| 發 | 兌 | 東京銀座四丁目 | 山中喜太郎 |
| 同 | | 同通三丁目 | 小林鉄次郎 |
| 同 | | 同横山町三丁目 | 辻岡屋文助 |
| 同 | | 横濱太田町 | 萬字屋孫次郎 |
| 同 | | 東京人形町通 | 武田平次 |

